

〈研究論文〉

文学批評における「人新世」

— 4つの論点 —

芳 賀 浩 一

【要旨】

大気化学の研究でノーベル賞を受賞したパウル・クルツェンは、人類が地球環境を左右する存在となった時代を「人新世」(the Anthropocene) と呼んだ。クルツェンは「人新世」が18世紀後半の産業革命とほぼ同時に始まったと考え、その見解が2002年に雑誌『ネイチャー』に掲載されると科学界を超えて歴史や文学の分野にも影響を与えるようになった。本論文では、この「人新世」の概念が文学批評、特にエコクリティシズムの分野においてどのように受容または批判されているのかについて「人間」、「オルタナティブ」、「スケール」、「ポストコロニアル」の4つの論点から考察する。その結果、現在の文学批評がいかなる課題に直面しているのかについても明らかにしたい。

キーワード：人新世、エコクリティシズム、文学批評

1. はじめに

大気化学者のパウル・クルツェン (Paul J. Crutzen) が産業革命以降の時代を「人新世」(the Anthropocene) と呼ぶことを2000年に提唱して以来、この言葉は欧米を中心に多くの議論を生み、その意味と意義にも様々な変化が生じた。クルツェンは人新世が「地球環境における人間の影響力が段階的に増大した」時代であると定義し、その始まりは偶然にもジェームズ・ワットが蒸気機関を設計した1784年と一致すると述べた (Crutzen (2000: 23))。しかし、「人間の影響力」は蒸気機関以外にも様々な要因を通して発揮されたと考えることが可能であり、起源をめぐる考察は科学者よりもむしろ人文学者を人新世の議論に惹きつける要因ともなった。人文学においては、人間による新しい時代としての人新世に含まれる西洋近代の人間中心主義が批判の対象となり、多くの「別の新世」(オルタナティブ) が提起された。後述するように、「人新世」のオルタナティブは「人間」をいかに認識するかをめぐる議論から生まれている。

人新世の概念に様々な問題があることは確かである。しかしその一方で、文学研究者や批評家たちが科学と人文学の間に共通のテーマを提起し、批判的考察と議論を展開したということには大きな意義があったといえるのではないだろうか。特にエコクリティシズムにおける批判

的考察は人新世をめぐる議論において「人間は地学的な力」であると同時に「唯一の力ではない」ことを私たちに再確認させた¹。また、人間による二酸化炭素等の排出が引き起こした環境改変である地球温暖化現象は、科学の力によって環境を改善するエコエンジニアリングによる解決法だけではなく、化石燃料の使用を必要とする我々の生活様式ならびにその生活様式に規定された価値観を再考するという、人文学的な解決法を模索する動きを生み出している。

人新世の概念は、その批判を通して議論の場が形成され次世代の有るべき人間の姿を描き出しつつある。また「人新世」は、その状況を生み出した社会的な格差や搾取の問題から人々の目を逸らしてしまう危険性がある一方で、人間の活動がもたらした環境破壊に概念的な理解の構図と重要性を与える役目を果たしている²。本稿では人新世の概念が人文学、特に文学批評の分野において提起した4つの論点として「人間」、「オルタナティブ」、「スケール」、「ポストコロニアル」を取り上げ、現在エコクリティシズムの分野において行われている議論の一部を素描し、筆者の考察を加えることで、人新世の思想の今後の行方を探ってみることにする。

2. 人間

クルツェンによる「人新世」の概念は「人間」が地球環境を変える大きな要因となったことを強調し、種としての人間存在（人類）の在り方を問うものであった。科学者であるクルツェンにとって人間は地球環境を破壊するだけではなく改善することも可能な存在であり、科学技術によって環境を改善するエコエンジニアリングこそが人間の目指すべき道であった。しかし、20世紀後半から階級、民族、性差といったアイデンティティーの問題を中心に展開してきた文学研究において、こうした種としての人間存在を重視することは、社会における様々な人間の差異を無化することにつながると目された。特に気候変動に対する人間の責任の所在を考えるうえで、このような「種」の枠組みは既に工業的な発展を遂げた国々にとって都合のよいものとして批判の対象ともなった（Biermann and Lövbrand (2019: 2)）。同時に、人間が地球環境を破壊し気候変動を引き起こした時代が人新世であるとすれば、この人新世における「人間」を代表するのが工業化を推進した人々であることにもなる。こうした見方からは、環境を破壊し発展を遂げた「人間」が他の人々や動物たちに対してどのような責任を負い、どのような役割を果たすべきかという問題提起もなされている³。数多ある動物種のひとつに過ぎない人間と地球環境に類を見ないほど大きな影響を与えるようになった人間、あるいは化石燃料の大量使用によって豊かになった人間とその恩恵に浴すことのなかった人間、といった人新世における複数の「人間」をどのように関係づけてゆくかが問われるのである。

人新世の概念は、20世紀の人文学における主要な争点である階級、民族、性差とは別の観点から人間存在を多様化している。2009年にはディペシュ・チャクラバルティ（Dipesh Chakrabarty）が「気候の歴史—4つのテーマ」（“The Climate of History: Four Theses”）を*Critical Inquiry*誌に発表した。この論文は人類の歴史と自然史が融合する人新世における人文学の在

り方を考察し、人新世に関する議論の重要な参照点となった。ここでチャクラバルティは人間が「地学的な力」となったという認識が近代における自然史と歴史（人間史）の区分を溶解させると論じている（Chakrabarty (2009: 197-222)）。さらにロバート・ストックハマー（Robert Stockhammer）は歴史言語学の観点から人新世における人間の意味を考察し、人間の属性は「人間的人間」（human-human）と地学・物理学的エージェンシーとしての「人間的ではない（ノンヒューマンな）人間」（nonhuman-human）に分けられるとし、「人間」は複合的な存在であると主張している（Stockhammer (2017: 50)）。人新世における人間の多様性、複数性を論じた例としては、他にもティモシー・モートン『人類—ノンヒューマンな人々との連帯』（Timothy Morton. *Humankind-Solidarity with Nonhuman People*, 2017）が資本主義の論理に包摂されないノンヒューマンな（人間的ではない）エージェンシーを含む複数的な人類という見方を掲げている。

また篠原雅武は『「人間以後」の哲学—人新世を生きる』において、人新世以前の「人間」が人間的尺度とそれ以外の世界の相関によって形成されていたのに対し、人新世においてはそのような（人間とそれ以外）の区分が崩壊する、と述べている（篠原 (2020: 5-6)）。これはチャクラバルティの論に沿った見解であるといえるだろう。人間存在が複数化し、ノンヒューマンのエージェンシーとの関係において流動化するというのが人文学における人新世の「人間」である。

したがって、クルツェン等の科学者が当初唱えた人新世における人間と、エコクリティシズムをはじめとする人文学者が主張する人間の間には大きな違いがあることに留意しておく必要がある。2019年に出版されたフランク・バーマン、エヴァ・ラヴランド編『人新世の衝突—環境政治思想の新しい方向』（Frank Biermann and Eva Lövbrand eds. *Anthropocene Encounters: New Directions in Green Political Thinking*）は過去15年に亘る人新世と環境政治の衝突、そしてそれに伴う思想の変遷を辿っており、人新世の包括的な理解を促進する著作であるが、この中で新物質主義の思想における人間とノンヒューマンのエージェンシーの相互作用、という考え方が人新世における人間の力による自然環境の変化という観察と矛盾していることが指摘されている（Biermann and Lövbrand (2019: 89)）。ここでは人文学者が総じて科学には疎く、科学者たちの説を批判することなく受け入れる傾向があることも疑問視されている。この指摘から考えられるのは、新物質主義のエコクリティシズムが自然の商品化や主流の科学的言説を無条件に受け入れるのではなく、複数の立場や現実によって変化する現象としての人新世を捉える必要性である。筆者は、そうした必要性を認めたいうえで、エコクリティシズムが地球環境を大きく変えるに至った人間に対し他の生物あるいは物質の力と存在を改めて認識させる倫理的な転回を主導していると分析し、肯定的に評価すべきであると考えている。

3. オルタナティブ—人新世の提唱に続く様々な「新世」

「人新世」の概念は当初から様々な問題が指摘されて批判を招き、対案として数多くのオルタナティブを生むことになった。一説には20を超える「新世」が提唱されているともいわれるが、

よく知られるものだけでも植民新世 (Plantationocene)、クトゥルー新世 (Chthulucene)、資本新世 (Capitalocene)、寡頭政治新世 (Oliganthropocene)⁴、均質新世 (Homogenocene)、プラスチック新世 (Plastinocene) といった「新世」がある (Samways (1999: 65-6)、Demos (2017: 56, 93)、猪口 (2020: 55-7))。

植民新世とクトゥルー新世には「サイボーグ宣言」で知られ学際的な人文学者であるダナ・ハラウェイ (Donna J. Haraway) が関わっている。植民新世とは文字通り、植民地主義下の経済活動によって環境破壊が進んだ時代のことである。植民地主義によって人、動物、そして植物が強制的に移動させられた結果、動植物と土地との関係が切り離され、経済は宗主国の嗜好に合わせてモノカルチャー化し、その影響は現代に及ぶ。それに対しクトゥルー新世は、人間を含めた動植物、菌類、非生命のアクター (マルチスピーシーズ) の混交 (アッサンブラージュ) を指向する時代としてハラウェイが提唱するものである。植民新世が経済的利益のために複雑な生物と環境の関係を切断し、価値と手段を画一化する時代と定義されるのに対し、クトゥルー新世は常にわれわれが他者たちと「共にある」ことを認識し、また世界を「共に作る」ために他者との関係につきものの困難や面倒に向き合い、回避しない時代とされる (Haraway (2016: 55, 101, 133))⁵。クトゥルー新世は植民新世という歴史的認識を経てハラウェイが獲得した、未来にあるべき時代の哲学といえるだろう。

また、均質新世はグローバル化によって地球上の生物多様性が急速に失われ、人間の文化も同質化してしまう時代という意味である。それに対し寡頭政治新世においては、環境破壊に責任のある少数の人間がその結果としての環境危機を回避する方法を見出す一方、その他の人間は環境の変化によって生活に深刻なダメージを被り、環境への対応をめぐる地球上の人間の間の不平等が一層大きく、明らかになると考えられている⁶。

そして、人新世に対する最も強力なオルタナティブが資本新世である。ジェーソン・ムーア (Jason W. Moore) が2014年の『生命の織物の中の資本主義—エコロジーと資本の蓄積』 (*Capitalism in the Web of Life: Ecology and the Accumulation of Capital*)、そしてアンドレアス・マルム (Andreas Malm) が2018年の『この嵐の進展—温暖化する世界における自然と社会』 (*The Progress of This Storm: Nature and Society in a Warming World*) において主張したのは、現在の環境危機の根源にあるのが人新世論者の主張するような産業革命や農業革命ではなく、資本主義に内在する不平等と搾取の構造であるということだった。マルムは現在主流の環境思想が生物としての人間と社会的人間、あるいは人間と他の動植物との複雑で網の目的な関係性を重視するのに対し、弁証法における二項対立的境界線の存在こそが問題の在りかを明確にすると主張する (Malm (2018: 173))。そして複雑さと矛盾を許容するのは現代資本主義の鏡像であり自然を利益に還元しようとする試みだと批判する (Malm (2018: 217-8))。マルムの議論は排出量取引や飲料水に象徴されるような自然物質の商品化の問題を鋭く論じており、「資本新世」という考え方を強くサポートするものである。

このマルム等の議論と軌を一にすると考えられるのが2016年に邦訳が刊行されたクリスト

フ・ボヌイユ、ジャン＝バティスト・フレゾス（Christophe Bonneuil, Jean-Baptiste Fressoz）『人新世とは何か―地球と人類の時代―の思想史』（フランス語の原著も同年）である⁷。両著者は人新世の言説が知らぬ間に覇権的な体系に立脚するようになっていくことに注意を促し、人新世の言説においてアントロポスー人間とは誰なのか、について歴史的なデータに基づいて考察している。本書によれば、人新世の言説において指摘される人間活動の環境への悪影響は「近代」において盛んに論じられていたにもかかわらず葬り去られてきた。戦争が環境に対して決定的な悪影響を及ぼし、軍事技術の民間利用がそれを恒常化させているが、石炭に始まるストック・エネルギー消費が生産体制の一律化を可能にし、線型的時間を生むことになったという（ボヌイユとフレゾス（2016: 249））。戦後の大躍進時代の環境破壊が主に資本主義のグローバル化によるものであったことから、本書は「資本新世」の立場に立っており、日本もまたバイオマスの国際取引においては発展途上国から大量の資源を買い入れることで地球の環境悪化を促進している富んだ国のひとつであることもデータによって示されている（ボヌイユとフレゾス（2016: 299））。

こうした資本新世の主張には説得力があり、現在の資本主義の在り方が環境問題の主要な要因のひとつであることは確かであろう。筆者は、問題が複雑であることが責任の所在の曖昧化につながるべきではないというマルムの主張に同意する一方、チャクラバルティも述べたように人新世の問題を資本主義だけの問題に還元することは一面的に過ぎるのではないかと考えている。非資本主義国家も化石燃料の燃焼を動力とする工業化を推進することで生活を豊かにすることに変わりはなく、また「人新世」の有力な証拠とされる米ソ冷戦下における核実験による放射性物質の地球上への拡散を資本主義の問題にのみ帰するのは難しい。現代の環境問題の根源には非再生エネルギー（化石燃料）の大量使用による社会構築や人工肥料による食料増産によってもたらされた豊かさと長寿がある⁸。人間はエネルギー消費（炭素の燃焼）による電力や食料の獲得という部分にのみ関心を向け、そこで生まれる二酸化炭素をはじめとする物質の行方と効果を考慮しなかったために環境のバランスを大きく狂わせることになった。これは経済体制だけの問題ではなく、体制を構築し動かす人間の視野と世界観、そして欲望の問題でもあろう。

一方、人間の間の格差の問題（貧困）、人間による他の動植物への暴力（大量絶滅）、そして非生物の使い捨てである環境汚染といった諸問題につながりを見出すことがエコクリティシズムの強みである。グローバル資本主義における経済的な画一化が文化的・生物学的な豊かさという面から批判的に検証されるべきであることには肯首するが、そのためには人間社会の問題だけではなく、人間の内面と身体、動植物や環境物質との関係を解きほぐすことで人間の生活・経済・文化における活動が環境的循環の一部であることを理解し、人間活動で終わらないノンヒューマンを含む循環の輪（サステイナビリティ）を描くことが本質的な解決への糸口なのではないだろうか。エコクリティシズムが物質を商品化に限定されない様々なエージェンシーとして見ることは、環境危機を招いた諸要因（近代化・工業化、人間中心主義、多様な資本

主義)に対する根源的なオルタナティブを提示し、人間とノンヒューマンを総体的に豊かにする行為だと筆者は考えている。

4. スケール

人新世の議論において現在⁹最も注目されているのが「スケール」の問題である。このスケールの問題は2010年代になってティモシー・クラーク (Timothy Clark) が取り上げ¹⁰、さらに2017年頃には様々な論者による議論が著書・論文の形で現れるようになった。トビアス・メネリー、ジェシー・オーク・タイラー編『人新世の読解—地学的時間における文学史』(Tobias Menely and Jesse Oak Taylor eds. *Anthropocene Reading: Literary History in Geologic Times*) は、人新世の概念が国境だけではなく人間の時間的枠組みを超えた流れやシステムに注目し、主体と客体、個と一般の関係を再考するものであるとした。さらにそこから生まれる地学的時間と人間的感覚のズレが大きな課題であることを指摘している (Menely and Taylor (2017: 11))。

そして、このスケール問題に焦点を当てたのがマイケル・トラベル・クラーク、デービッド・ウィッテンバーグ編『文学と文化におけるスケール』(Michael Travel Clark and David Wittenberg eds. *Scale in Literature and Culture*) である。この本の第2章でザッハ・ホートン (Zach Horton) は、人新世の議論が巨大なスケールと西洋文化の影響を中心に展開している点を疑問視し、そのうえで人新世とは「地学的時間、惑星的空間というよりも、西欧思想が自らの限界に直面したショックである」と指摘する (Horton (2017: 36))。さらに興味深い指摘は、植民者である西洋的な主体が西洋と非西洋社会の間に横たわるスケールの違いを破壊 (scaler collapse) して均質化すること、さらにこの均質化が植民地化の過程で生じた理性的論理によってもたらされるということだ。ホートンは地球を俯瞰する西洋的視点と自己言及的な主体性が文化的背景の異なるスケールを排除し、結果として自らのスケールをも見失っているとし、人新世が西洋による植民地的世界の崩壊の概念であると主張している¹¹。

また、同書に収められた論文「反ズーム」(“Anti-Zoom”)においてブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour) は、人新世が地域や国といった境界を無視すると同時に地図や言説と地上における経験、経路を同一視しており、宇宙からの視線と地上の視線を直接に結びつけるズーム機能は異なるスケールにおける差異や参照点を無化している、と語る (Latour (2017: 97-101))。彼は差異を維持したまま接続可能性を追求することの重要性を唱えており、人新世が異なるスケールを直接結び付ける傾向があることに批判的である。さらに同書の第7章においてはアイカテリニ・アントノポロウ (Aikaterini Antonopoulou) がラトゥールの思想を拡張しつつ、今や人間の身体モデルは固定されたアイデンティティーや物理精神的な皮膚の境界を超えていることを指摘し、惑星のモデルから無限の結びつきによって構築される人間身体のスケールへと戻ることを提唱している (Antonopoulou (2017: 196))。

つまり人間は常に外部との物質的交換によって維持される運動体として地球環境との多様な

関係の中で生きているが、人間個人の時空間的スケールと地球環境のスケールとの間には様々な隔たりがあり、そうした隔たりを無化することなく、つながりをいかに表現するかが鍵となっているのである。

こうした議論の流れの中でピーター・ヴァーミューレン (Pieter Vermeulen) は『文学と人新世』 (*Literature and the Anthropocene*, 2020) において、人新世の重大なテーマであるスケールについて「スムーズなズームの拡大・縮小ではなく、ジャンプや突然の狂いや非連続を特徴とする」ことの認識が重要であると主張する (Vermeulen (2020: 98))。そして彼は日常的な物質の関係と気候変動のような人間の感覚を超えた現象の間のスムーズではない関係に注目する。多様なスケールを複雑に包含する気候変動においては「人間の意図的な破壊的行動と意図せぬ特定の決定の影響の違いは重要ではなくなり、原因ではなくその効果が気候変動世界の現実を作ることになる」とし、それはドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックが指摘したように意味を管理することが不可能な「副作用の時代」となることが語られる (Vermeulen (2020: 149))。結論としてヴァーミューレンは「もし、人間の命が意味あるものであり続けたいのであれば、消滅や無知のファンタジーに抗い、痛みを伴う暴力的な遺産に向き合わなくてはならない」と語り、あくまで人間と他の存在の作用の関係を追求し続けることが必要であるとする (Vermeulen (2020: 171))。

また、エヴァ・ホーンとハネス・ベルグサラール (Eva Horn and Hannes Bergthaller) による『人新世—人文学にとっての主要な課題』 (*The Anthropocene: Key Issues for the Humanities*, 2020) が指摘するように、人間の感覚を超えたマイクロとマクロのスケールを生成する要因としての科学圏とどのように向き合うかも課題となる。放射能汚染や遺伝子操作等に見られるように人間が生み出した科学が一部で人間の手に負えなくなりつつある一方、気候変動やコロナ禍の状況に対しては科学圏が生み出す知見が仮想現実として現実世界を動かすようになっている。エコモダニズムとポストヒューマニズムが共存する人新世においては、人間とノンヒューマンのエージェンシーを社会文化と生物地学といった比較が困難な複数のスケールで同時に考えることが求められる。ホーンとベルグサラールは、エネルギーの消費に依存しない自由の在り方を模索することが人新世における人文学的課題であることを冷静に訴えるが、そのためにはエネルギーをめぐるスケールの違いをどのように翻訳し架橋していくかが問われている。

以上のようなスケールの考察は、これまで我々が認識してこなかった人間の行為と環境世界の関係が科学を通して部分的・間接的に認識されるようになったことから生じたものである。人新世の概念を導く、人間の直接的な理解を超えたマイクロとマクロの世界の知見が、西洋近代的な人間と社会の認識に大きな変更を促している。それは一見、自然との一体化を語る前近代的な直感や潜在的知の正当性を訴えるかのようである。「自然へ還れ」という主張はいつの時代も人を惹きつける。人新世の文学的想像においては、しばしば科学技術の暴走による人間の絶滅や文明の前近代レベルへの退化が描かれる¹²。例えば多和田葉子の『献灯使』(2014年)と同書に収められた「動物たちのバベル」はともに近代社会が崩壊した後のアポカリプス的世界

を描いている。「動物たちのバベル」は人間が絶滅した後に人間を反面教師として動物たちが世界のルールを再構築するという寓話であるが、人間の多様性や動物間の差異は画一化されている。一方、『献灯使』は自然環境の劣化と近代社会の崩壊によって人間の身体機能と社会システムが退化したかのような世界を描く。しかし、その多様性を失った環境に適応した若者は、一見退化したかのように見える身体を持ちながら、しかしそれゆえに未来への希望となる。この作品では、近代の線型的発展のモデルが異なる環境のスケールによって反転し捻じれることによって、近代的スケールの創造的批判となっている。異なるスケールの差異とつながりを示した一例といえるだろう¹³。

このようなスケールの考察から浮かび上がってくるのは、人新世という概念を呼び起こした根源的な欲望の問題である。人新世の議論の主な目的は、化石燃料の利用による環境への負荷が地球のキャパシティーを超えつつある（あるいは超えた）と認識されるようになった現代において、いかに人間がその化石燃料によって得た自由や豊かさを失うことなく環境への負荷を軽減することが出来るかを考えることである。ここに人新世が近代社会の利益を享受した人間の問題であるという側面があることは否定できないだろう。人新世は、化石燃料のみならず、第三世界の人々や地球上の動植物と鉱物資源を搾取し、使い捨てた結果ともいえるのである。

そこで焦点化されるのが人新世におけるポストコロニアルの問題である。西洋近代的、地球俯瞰的視線が破壊してきたと考えられるスケール間の差異、そして現在の環境危機や災害の影響が最も顕著に現れる地域や人々の問題は、人新世が科学よりむしろ人文学的課題であることを示しているのではないだろうか。

5. ポストコロニアルな人新世¹⁴

「人新世」の概念が、欧米諸国による近代的工業化がもたらした負の側面としての環境破壊を人間の歴史を超える地学的スケールから見ることによって「人類」の問題と位置づけたとすれば、そのことに正面から異を唱えたのがキャスリン・ユーソフ（Kathryn Yusoff）の『膨大な数の黒人新世たち、あるいは無か』（*A Billion Black Anthropocenes or None*, 2018.）である。科学に基づく画一的な気候変動の問題提起に対し、地質学という科学が有色人種を抑圧し資源化することによって成立したと述べるユーソフは、科学が示す事実や真実に対する人文学的アプローチの可能性の一端を示している。地球温暖化の主な原因として石炭や石油の燃焼による二酸化炭素の排出が挙げられるが、石炭採掘は奴隷的な労働によって行われ環境被害・健康被害を引き起こした。液体である石油はそうした人的役割を機械やパイプラインに代替させることが可能であり、また自動車や航空機の燃料として普及したことから戦後に消費量が爆発的に伸び、大躍進による地球温暖化の大きな要因となった。こうした流れを作り上げることに貢献した地質学は、人種差別に基づく奴隷的労働と植民地主義による海外進出があって初めて可能になったとユーソフは考える（Yusoff (2018: xii, 19, 59, 63, 107)）。

このような人新世とポストコロニアル世界の関係と文学の役割に焦点を当て、主流の近代小説が自然災害を描くことに必ずしも適していないことを主張した評論がアミタヴ・ゴーシュ (Amitav Ghosh) の『大いなる錯乱—気候変動と〈思考しえぬもの〉』(*The Great Derangement: Climate Change and Unthinkable*, 2016) である。ゴーシュの主張については他所で言及しているため詳述しないが¹⁵、エコクリティシズムにおいてしばしば参照され批判もされている彼の論点は、正統的リアリズム文学における、人間の内面を描くことを重視した表現手法が現代の惨事(カタストロフィー)を描くのものにはや十分ではない、ということである。それに対し、ウルズラ・ハイザ (Ursula K. Heise) は人新世においてはSFが既に標準的なジャンルとなっていることを指摘し¹⁶、またヴァーミューレンは人新世の気候小説が既存の多様な文学ジャンルの混交(アッサンブラージュ)であり、そのため不可解で異様な作用を生み出すことになる、と述べる (Vermeulen (2020: 62-4))。

さらにゴーシュが消費社会化した西洋とその影響が一部にとどまる第三世界を対比するのに対し、ティモシー・クラークは『エコクリティシズムの価値』(*The Value of Ecocriticism*, 2019) において「洪水、社会崩壊、旱魃、水をめぐり争い、のイメージは、社会不安の認識とその表現であるが、それをスペクタクルやスリラーに転換することで否定することにもなる」と述べ、ゴーシュがジャンル小説の表現の問題に向き合っていないことを批判している (Clark (2019: 98))。そしてクラークは欧米における気候小説の課題が環境問題を効果的に否定してしまう、消費社会化された表現に向き合うことだと指摘する (Clark (2019: 98))¹⁷。ゴーシュとクラークの主張は一見対立しているようだが筆者の見解では、環境破壊の影響が災害として日常的に襲ってくる第三世界と環境問題が大衆の注目を集めるスペクタクルとして享受される欧米は同じコインの裏表なのである。つまり、文学における環境的循環を考えるためには、消費社会を実現した地域における表現の分析と第三世界における惨事の表現の困難さを繋げることが重要なのではないだろうか。

ゴーシュの評論に対する欧米の文学研究者たちの反応は、ゴーシュ自身が作品中の異常気象や野生動物を通して表現している、環境意識の高い先進国と脆弱な環境に晒されたインドの人々の関係の複数性を考察するうえで非常に興味深い。ゴーシュの小説『ハングリー・タイド』(*The Hungry Tide*) は、先進国の環境NGOと環境保護の思想が現地の難民を迫害に追い込んだ歴史を文学的に描き、環境意識がコロニアルな暴力として作用する可能性を示唆している。それに対しクラークは、西洋における課題が環境と消費社会の結びつきを解きほぐし、批判的に表現することだと述べる (Clark (2019: 99))。環境問題がスペクタクル化することで真の問題に向き合わずにエンターテインメントとして消費され、またその延長上で第三世界においては特定の動植物の保護という暴力となって現地の生活を混乱させることにもなる。このように考えると、ゴーシュが自然災害をうまく表現できないという葛藤そのものがスペクタクル化への抵抗を語っているといえるのではないだろうか。効果的な表現が実現できない一方で、安易な消費を避けることにもなっていると考えられるからだ。

ゴーシュは2021年に新たな評論『ナツメグの呪い—危機にある惑星の寓話』(*The Nutmeg's Curse: Parables for a Planet in Crisis*)を刊行した。これはオランダ東インド会社によるインドネシア・バンダ諸島のナツメグの独占と原住民抹殺の歴史を中心に考察した著作であるが、彼は植民地主義の暴力とそれを支えた軍勢力が環境を破壊する最大の要因であるにもかかわらず、地球環境に関するデータの多くが軍に関係する機関から提供されており、環境保護の文脈において軍への批判がほとんどされないことに疑義を呈している (Ghosh (2021: 123-4))。また彼はオランダ人の植民者たちがナツメグの経済的価値にのみ目を向け、自然環境の文化的側面を抑圧し沈黙させたことが今日の地球環境の危機につながっていると考える。こうした評論を通してゴーシュは正統的な文学において何をどのように表現するべきかを模索していると考えられ、それが今後の小説作品にどのように反映されるかが注目される。

現代において世界最大の二酸化炭素排出国である中国はかつて近代列強国の進出によって国を分断され、またアメリカに次いで世界3位の排出国インドがかつてイギリスによる植民地支配を受けた国であることから明らかなように、今日の環境問題をポストコロニアルの課題と切り離して考えることはできないだろう¹⁸。人新世は人間の活動、特に産業革命以降の科学技術と産業が地球に対してその復元力を上回る破壊と影響をもたらすようになったとされる時代である。しかし、ここで考えるべきは、人間と自然、という構図のみならず、欧米や日本とアジア・アフリカ・南米といったコロニアルな関係における旧植民地の回復力の問題でもある。

今私たちは人間とノンヒューマンの間に横たわる支配—被支配の関係を批判的に検証し、その検証を土台に人間—ノンヒューマンたちの相互作用を認識し直すことによって新たな環境の在り方を描き出すことが求められており、その課題に対してゴーシュの小説はむしろ恰好の素材となっている。人新世の芸術に内包される不愉快さ、奇妙さ、コミカルさ、あるいは「不可能性」は、工業先進国が自ら作り上げ世界に普及させた時空間の枠組みとしての「小説」の問題に気づき、変革を試みていることの居心地の悪さであるのかもしれない。

6. 結び

本稿では、人新世に関わる4つの論点として「人間」、「オルタナティブ」、「スケール」、「ポストコロニアル」に着目し、エコクリティシズムの分野で現在進行中の議論の一端を紹介したうえで筆者の考察を述べた。人新世の概念は、文学批評における近代的個人としての「人間」の領域を空間的にも時間的にも拡張し、さらにその領域の境界は物質的にも記号的にも常に外部との相互作用によって生成されることを示した。そのため人間と「自然」との関係も最早二項対立的ではあり得ないという認識を定着させた。文学的課題としては、いかに気候変動や自然災害を個人、社会、地球といったスケール、あるいは人間の身体感覚、科学、そして政治の領域において語り、それらを有機的に結びつけるかが問われている。より具体的に述べれば、現在「世界文学」の問題として議論されている「精読」と「遠読」の対立は、このスケール

ル問題の文学版として捉えることができるだろう。原著作品を対象を限定し、そこに詳細な注意を払う「精読」と翻訳を含む各国・各時代の作品を等価に分析する「遠読」の間には、作品それ自体の固有の価値をめぐる考え方の違いが存在し、そこには人新世のスケールの移行において指摘されたものと相似形を成す問題を指摘することが可能だ。人新世の時代において「精読」と「遠読」は架橋される必要があるが、その差異は安易に消去されるべきではなく、両者が結び付けられることで等閑視されることになる存在に新たな注意が向けられる必要がある。人新世においてポストコロニアルの問題が改めて注目されたのと同様に、世界文学という俎上においては翻訳され得ない作品と表現、そして翻訳の力学の分析も重要になるであろう。あるいは複数の言語で文学作品を読み解釈することの需要も高まるはずである。

人新世時代の読解は複雑になる。しかし、その複雑さを科学あるいは人文学の一側面から見ることで分かりやすく可視化し、問題解決の策を現前させるだけでは人新世の概念が持つポテンシャルを見誤ってしまうことになるだろう。人新世によって拡張されたスケールとそれにより生じた齟齬を通して、複雑な世界を不完全な言葉で描き伝える文学的営為の可能性を改めて見直すことが必要なのではないだろうか。

【注】

- ¹ 例としては、Frank Biermann and Eva Lövbrand, eds. *Anthropocene Encounters: New Directions in Green Political Thinking*. Cambridge, 2019, p. 7. ここでの「地学的」はgeologicalの訳語であるが、同じgeologyでも後述するユーソフの場合は化石燃料の採掘を可能にした学問という意味であるため「地質学」と訳した。
- ² Helena Feder, ed. *Close Reading the Anthropocene*. Routledge, p. 2.
- ³ Morten Tonnessen, Kristin Armstrong Oma, and Silver Rattasepp. *Thinking About Animals in the Age of the Anthropocene*. Lexington Books, 2016, pp. 12-13.
- ⁴ 「少ない」を意味するoligosとAnthropoceneを合成し、少数の人間が支配する寡頭政治の時代を表したと考えられる。
- ⁵ 筆者にとってより重要に思われるのは環境問題を「解決」という考え方に対して「対応し続ける」という姿勢を打ち出したことである。人文学において問題は科学的に解決できるものではなく、人がかかわり続けることによって関係が持続すること、またかかわり続けること自体に価値を見出すことが重要なかもしれない。Donna Haraway. *Staying with the Trouble: Making Kin in the Chthulucene*.
- ⁶ クリストフ・ボヌイユ、ジャン＝バティスト・フレズス著、野坂しおり訳『人新世とは何か―地球と人類の時代>の思想史』青土社、2016年、96頁。
- ⁷ 猪口智広は「人文学において地質年代を語ることの意味とは何か：人新世の複数の名付けをめぐる」において上記『人新世とは何か―地球と人類の時代>の思想史』が論じる7つの新世について

て解説している。『地質学史懇話会会報』第54号、2020年、54-61頁。

- ⁸ ピーター・ヴァーミューレン (Pieter Vermeulen) は、資本新世について、「完全に資本主義ではない中国が世界最大の二酸化炭素排出国であること」(12)を反証として挙げる一方、資本主義のダイナミクスを用いることは、人間のインパクトの大きさを理解するうえで役に立つ、ともしている。Pieter Vermeulen. *Literature and the Anthropocene*, Routledge, 2020.
- ⁹ この文章は2021年末から22年春にかけて執筆した。
- ¹⁰ Timothy Clark. “Scale.” *Telemorphosis: Theory, and Era of Climate Change*, edited by Tom Cohen, Open Humanities Press, 2012.
- ¹¹ 芳賀浩一「エコクリティシズムで読む小松左京の気候変動小説」『現代思想』10月臨時増刊号、青土社、2021年、258-259頁。
- ¹² 多和田葉子『献灯使』や「動物たちのバベル」の他に川上弘美『大きな鳥にさらわれないよう』や北野慶『亡国記』などが挙げられる。
- ¹³ 拙著『ポスト3・11小説論—遅い暴力に抗する人新世の思想』237-257頁。
- ¹⁴ エコクリティシズムのサブジャンルであるポストコロニアル・エコクリティシズムにはロブ・ニクソン (Rob Nixon) をはじめ多くの論者が存在するが、本稿では人新世の議論に焦点を当てているため取り上げていない。近代における自然と文化(人間)の分離と階層化が人種による差別と管理に繋がっていることを指摘し、分離の暴力ではなく相互依存関係の認識を訴えるポストコロニアル・エコクリティシズムにとって、人新世の概念は自らの環境への暴力をグローバルな現象へとすり替える危険性を孕んでいる。DeLoughrey, Elizabeth and Handley, George B eds. *Postcolonial Ecologies: Literatures of the Environment*. p. 26.
- ¹⁵ 芳賀浩一「気候変動をめぐる『遅い暴力』と現代文学の射程」『現代思想』3月号、青土社、2020年、136-143頁。
- ¹⁶ Ursula K. Heise. “Climate Stories: Review of Amitav Ghosh’s ‘The Great Derangement’.” *The b2o review*, February, 19, 2018. <https://www.boundary2.org/2018/02/ursula-k-heise-climate-stories-review-of-amitav-ghoshs-the-great-derangement/> (2021年9月18日閲覧)。
- ¹⁷ ゴーシュが正統的文学の表現方法の限界を指摘しながら、オルタナティブとしてのジャンル小説に目を向けないことへの批判はハイザとクラークに共通するものである。
- ¹⁸ ゴーシュ (2021: 165) は『ナツメグの呪い』の中でインドや中国、インドネシアなどの都市エリートと中産階級の人々も現代の環境問題には責任があると述べている。

付記：本研究は科研費(18K005111)の助成を受けたものである。

紀要査読者および編集者から様々な指摘をいただいた。感謝いたします。

【参考文献】

- Antonopoulou, Aikaterini. "Large-Scale Fakes: Living in architectural Reproductions." Clark, Michael Travel and Wittenberg, David eds. *Scale in Literature and Culture*, Palgrave and Macmillan, 2017, pp. 177-199.
- Biermann, Frank and Lövbrand, Eva eds. *Anthropocene Encounters: New Directions in Green Political Thinking*. Cambridge, 2019.
- Chakrabarty, Dipesh. "The Climate of History: Four Theses." *Critical Inquiry*, Vol.35, No. 2 (Winter 2009), pp. 197-222.
- Clark, Michael Travel and Wittenberg, David eds. *Scale in Literature and Culture*, Palgrave and Macmillan, 2017.
- Clark, Timothy. *Ecocriticism on the Edge: The Anthropocene as a threshold concept*. Bloomsbury, 2015.
- The Value of Ecocriticism*, The Cambridge UP, 2019.
- Crutzen, Paul J. and Stoermer, E.F. "The Anthropocene," *IGBP Global Change Newsletter* 41, 2000, pp. 17-18.
- Crutzen, Paul J. "Geology of mankind." *Nature*. Vol. 415, 2002, p. 23.
- DeLoughrey, Elizabeth and Handley, George B eds. *Postcolonial Ecologies: Literatures of the Environment*. Oxford UP, 2011.
- Demos, T.J. *Against the Anthropocene*. Sternberg Press, 2017.
- Feder, Helena ed. *Close Reading The Anthropocene*. Routledge, 2021.
- Ghosh, Amitav. *The Hungry Tide*. A Mariner Book, 2005.
- The Great Derangement -Climate Change and Unthinkable*. The Chicago UP. 2016.
- The Nutmeg's Curse: Parables for a Planet in Crisis*. The Chicago UP, 2021.
- Haraway, Donna J. *Staying with the Trouble: Making Kin in the Chthulucene*. Duke UP, 2016.
- Heise, Ursula K. "Climate Stories: Review of Amitav Ghosh's 'The Great Derangement'." The b2o review. <https://www.boundary2.org/2018/02/ursula-k-heise-climate-stories-review-of-amitav-ghoshs-the-great-derangement/> (2021/9/18 accessed)
- Horn, Eva and Bergthaller, Hannes. *The Anthropocene: Key Issues for the Humanities*, Routledge, 2020.
- Horton, Zach. "Composing a Cosmic View: Three alternatives for Thinking Scale in the Anthropocene." Clark, Michael Travel and Wittenberg, David eds. *Scale in Literature and Culture*, Palgrave and Macmillan, 2017, pp. 35-60.
- Latour, Bruno. "Anti-Zoom." Clark, Michael Travel and Wittenberg, David eds. *Scale in Literature and Culture*, Palgrave and Macmillan, 2017, pp. 93-101.
- Malm, Andreas. *The Progress of This Storm: Nature and Society in a Warming World*. Verso, 2018.
- Menely, Tobias and Taylor, Jesse Oak, eds. *Anthropocene Reading: Literary History in Geologic Times*. The Penn State UP, 2017.
- Moore, Jason W. *Capitalism in the Web of Life: Ecology and the Accumulation of Capital*. Verso, 2015.

- Morton, Timothy. *Humankind-Solidarity with Nonhuman People*. Verso, 2017.
- Samways, Michael. "Translocating fauna to foreign lands: Here comes the Homogenocene." *Journal of Insect Conservation* 3 (2), 1999, pp. 65-66.
- Stockhammer, Robert. "Philology in the Anthropocene." Sarah Fekadu ed. *Real Yearbook of Research in English and American Literature Volume 33 (2017) : Meteorologies of Modernity Weather and Climate Discourses in the Anthropocene*. Narr Francke Attempto Verlag GmbH + Co., 2017, pp. 43-64.
- Tonnessen, Morten, Oma, Kristin Armstrong and Rattasepp, Silver. *Thinking About Animals in the Age of the Anthropocene*. Lexington Books, 2016.
- Vermeulen, Pieter. *Literature and the Anthropocene*, Routledge, 2020.
- Yusoff, Kathryn. *A Billion Black Anthropocenes or None*. University of Minnesota Press, 2018.

- 猪口智広「人文学において地質年代を語ることの意味とは何か：人新世の複数の名付けをめぐる」
『地質学史懇話会会報』第54号、2020年、54-61頁。
- 篠原雅武『「人間以後」の哲学—人新世を生きる』講談社、2020年。
- 多和田葉子『献灯使』講談社、2014年。
——「動物たちのバベル」『献灯使』221-265頁。
- 芳賀浩一『ポスト3・11小説論—遅い暴力に抗する人新世の思想』水声社、2018年。
——「気候変動をめぐる『遅い暴力』と現代文学の射程」『現代思想』3月号、青土社、2020年、136-143頁。
——「エコクリティシズムで読む小松左京の気候変動小説」『現代思想』10月臨時増刊号、青土社、2021年、254-264頁。
- ボヌイユ、クリストフ、フレズス、ジャン＝バティスト 野坂しおり訳『人新世とは何か—地球と人類の時代—の思想史』青土社、2016年、96頁。

The Anthropocene in Literary Criticism: Four Issues

Koichi Haga

Abstract

The Anthropocene, proposed in the early 21st century by Paul Crutzen, an authority on atmospheric chemistry and Nobel laureate, defines the period since the Industrial Revolution of the late 18th century as the time when humans became dominant influence in the global environment. The Anthropocene has had an impact beyond the scientific community into the fields of history and literature. In this paper, I draw how the concept of the “Anthropocene” has been accepted in literary criticism, especially in the field of ecocriticism, and what problems have been pointed out through this criticism that have prompted a transformation of the concept of the “Anthropocene” from the standpoint of literature. My analysis focuses on “human,” “alternative,” “scale,” and “postcolonial” as the four main issues in the “Anthropocene,” wherein I introduce their respective debates and discuss what changes the “Anthropocene” bring to literary studies.

Keywords: Anthropocene, Ecocriticism, Literary Criticism